

数字が並ぶとなぜか幸せな気持ちになるのは、私だけでしょうか。

## つまずきこそ最大の学びチャンス

とあるずいぶん昔の授業中。国語の学習場面にタイムスリップしてみたいと思います。

5年生の教室。「わらぐつの中の神様 ((杉みき子)」という物語を読んでいるところでした。ちょっとだけあらすじを。主人公まさえは、明日のスキーの授業で使う靴がぐっしょりぬれており、ピンチ。そこでおばあちゃんが「わらぐつ」を提案。え〜、みっともない、とわらぐつのよさがわからないまさえに、おばあちゃんが昔話を始めます。わらぐつの中に「神様」がいるお話。その昔話の主人公はおみつさん。たいそうな働き者でしたが、ある雪下駄に一目ぼれ。その雪下駄を買うための奮闘の中で、出会う人とは…

その雪下駄におみつさんが出合う場面。かなさんはとても悩んでいるようです。なんだか読みづらい、いわゆるつまずきを感じているようでした。その原因が次の一文。そこには「白い軽そうな台に、ぱっと明るいオレンジ色の鼻緒。上品なくすんだ赤い色の爪皮(つまがわ)は、黒いふっさりとした毛皮の縁(ふち)に飾られています」とあります。

はて、どこにつまづいているのかな。実は・・・「台」という言葉。

白にオレンジに赤に、それから黒。色のコントラストがとても素敵で、おみつさんが一目ぼれする気持ちはよくわかる。しかし、白い台の上に置かれている雪下駄を買ってしまうと、“白い台”はなくなる。白がない色のコントラストは、一気にぼんやり。それほど魅力がなくなってしまうのではないか。なるほど。よく読んでみると、その前の一文には、丁寧にその雪下駄が入り口近くの台の上に飾ってある、と説明してあるではありませんか。

2つの「台」。前半は展示台の「台」。動かない。買ってもしついてきません。問題の台は、下駄の「台」。足をのせる部分のことです。

当時、そのつまずきの原因がわからず、みんなで色のコントラストのよさを語りつくし、かなさんの説得を試みましたが、失敗。かなさんのつまずきは、色のコントラストにあらず。残念…

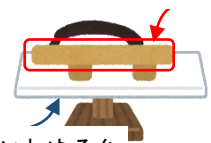
私たちは、一人ひとりものを見る枠組みみたいなものをもっています。それを、認知科学では「スキーマ」と呼ぶそうです。その個性的な「スキーマ」は、言語化することが難しく、他者にわかりづらい。その上、自動で動き出します。かなさんの「スキーマ」では、台は(いわゆる)台であり、(下駄の)台ではない。だから、その色のコントラストのよさが読み取れなかった。もしかして、色のコントラストのよさで説明されても、そのよさはわからない。

その時、かなさんはつぶやきます。「台はなくなるでしょ…」

私も含め、みんなでハッとさせられました。この発言を契機に、みんなで“台”の意味を辞書で調べました。すると、あるじゃないですか。下駄の足をのせるところって。かなさんの表情がぱっと明るくなったことはいうまでもありませんね。

つまずきはしない方がいいと思われがちです。しかし、つまずきは、新しい「スキーマ」を獲得する大チャンスをもたらす場合がたくさんあります。なんで同じ失敗を繰り返すのか、と目くじらを立てるより、じっくりとそのつまずきの原因を子どもたちの言動から探ることが、遠回りに見えて一番近道の「学びへのいざない」なのかもしれません。

下駄の台



いわゆる台